



## 写真で見る社会科

### 銅器の町「高岡」

高岡市は県西部の中心地、高岡銅器は全国シェアの90%を占め、アルミサッシの生産額も全国一の商工業都市である。高岡大仏(写真①)は、高岡の伝統産業である高岡銅器の技術を結集して造られ(現存するものは、1907年着工、1933年完成。古くは鎌倉時代建立の木造大仏に遡る)、奈良、鎌倉にならぶ大仏として市民に親しまれている。

高岡地域は、もとは「関野」と呼ばれ、江戸時代には、加賀藩の加賀、能登、越中の三国の中心に位置していた。加賀藩第2代藩主・前田利長は、富山城焼失後、1609年、「関野」に高岡城を建設し、加賀藩の軍事拠点にすることを目的とし、高岡の町づくりを行った。

利長は、宅地の無償提供、借地料免除等を行い、高岡に多くの人を集めた。なかでも大坂の河内丹南から礪波郡西部金屋に連れてきていた7人の鋳物師を現在の金屋町に呼び寄せ、様々な特権を与えて鋳物産業を保護した。のちの高岡銅器産業の始まりである。当時、銅は、精錬販売先の大坂、ほか越前、美濃などから買っており、伏木湊から小矢部川の水運を利用して搬入された。明治時代以降は、伏木港を介して海外からの原料の輸入が主である。

1615年、高岡城は幕府の一国一城令により取り壊しとなり、武士・商工業者が高岡の地を離れていったが、3代藩主利常は町の衰退を防ぎ、城下町から商工業の町へ

と転換させた。利常は、利長の業績を称え、大名の墓所として最大級といわれる墓所を建設した(写真②)。

利長が生み、利常が育てた「ものづくり」の精神は、400年たった現在も受け継がれている。神仏具、美術銅器制作会社の山口さんは、久乗編鐘を考案した(写真③)。もともとは仏具であるお鈴であるが、試行錯誤を繰り返し、低音から高音までの3オクターブの音階を大中小3サイズの37個で表現できるようになった。「高岡ならではの職人の精密な技術力の蓄積の賜物」である。「地産地奏」を提唱する高岡関野神社の神職の酒井さんが、これに目をつけた。そして、「音の風景で地域の活性化ができないか」とお鈴のメロディーをJR高岡駅の発着曲に使用してもらうよう働きかけ実現させた。

子どもたちも「ものづくり」に取り組んでいる。高岡市では全国で唯一、小学校5・6年生、中学校1年生に「ものづくりデザイン科」を教育課程に位置づけ、各学校で様々な「ものづくり」が行われている(写真④：ペーパーウェイト：鋳型をつくり、溶かした錫を流し込んで造る。鋳物工房・利三郎にて制作)。

「高岡」は今年、開町400年を迎えた。改めて先人たちの業績に敬意を表したい。(富山県公立小学校教諭)

#### 写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。